奈良・藤原宮跡

1 所在地　奈良県橿原市四分町
2 調査期間　一九八一年（昭56）五月～一九八二年（昭57）三月
3 発掘機関　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者　狩野　久
5 遺跡の種類　宮殿・官衙跡
6 遺跡の年代　七世紀末～八世紀初頭
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八一年度は宮の西南隅地域調査（第三四次）において木簡が一点出土したのみである。当地域は宮の西面大垣と南面大垣の接続部を含む場所で、面積一四六二㎡を調査した。藤原宮時代の遺構は両大垣の他、西面内濠と南面内濠の接続部、西面外濠・南面外濠等である。両外濠の接続部分は民家があり、調査区外である。

西面大垣は七間分一九m、南面大垣は六間分一六m検出し、柱間寸法は二・七m（九尺）である。内濠は、幅は一・八～二・二m、深さ〇・七mで北流し、堆積層は上・中・下三層あり、上層からは多量の瓦が出土したが、中・下層は遺物が少ない。

外濠は、北面や東面においては廃都と共に埋没したが、西面・南面においては一〇世紀頃まで水路として機能しており、流量も多く、後世の氾濫と浸蝕により著しく拡大・変形している。西面外濠は二七m分を検出したが、幅一〇mにまでなる個所がある。当初の流路を残している部分から推測すれば、下底部幅は五m程となる。南面外濠は二〇m分を検出し、溝幅は東端で六・二mあるが、溝下底では三mの当初の流路痕跡を残している。西半も二次的に溝幅が広がり、北岸は北西方向に斜行して西面外濠へ向う。深さは、南面外濠で一m、西面外濠の南端は一・三m、北端は一・六mであり、それぞれ西流し、北流する。西面外濠の堆積層は五層あり、底から灰色バラス、灰色粘土Ⅲ、灰色砂、灰色粘土Ⅱ、灰色粘土Ⅰの順である。最下層の灰色バラス層は広がった溝の全域にあり、藤原宮期から平安初期までの遺物を含み、木簡もこの層から出土した。最上層からは一〇世紀の遺物が出土している。南面外濠の堆積層もほぼ同様である。外濠からの他の出土遺物としては、土器・瓦の他、等身大人形、削り掛け、陽物形板状品、曲物、槽、隆平永宝、延喜通宝、獣骨、桃核等の自然遺物、弥生時代の土器、銅鏃等がある。

8 木簡の釈文・内容

・×□□
　欲□ミ□×
・×五□〔年カ〕八月十九×　(74)×(26)×4　081

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』一九八二年

（加藤　優）